## 今も瀬戸内にそびえ立つ鈴木商店の煙突

鈴木商店は第一次大戦中、砲弾の受注をきっかけに非鉄金属事業を一気に拡大する。銅、亜鉛の製錬のため巨大な煙突が建てられた。実は瀬戸内に今でも鈴木商店時代の巨大な煙突が2本、悠々とそびえ立ち、建設以来、瀬戸内を通る船の目印にもなっていた。

### ■ 太郎煙突の愛称で現存～岡山県

その一つが岡山県日比にある日本金属日比製錬所であった。明治36（1903）年に鈴木商店が買収し、銅の製錬のために、大正5（1916）年に日本金属と改称し、一気に事業を拡大した。現在は、三井金属鉱業グループの「日比製煉」として操業している。

鈴木商店当時に建てられた社屋はすでに取り壊されているが、太郎煙突の愛称で親しまれたこの巨大な煙突は、使用こそされてはいないが、現存している。

大正時代中期の日本金属日比製錬所

太郎煙突の愛称で親しまれた昭和30年頃の製錬所大煙突

現在の煙突（今は使用されていない）

## 今も瀬戸内にそびえ立つ鈴木商店の煙突

### ■ 工期7ヵ月の巨大煙突～山口県

もう一つは、現在の周南市にあった日本金属徳山製錬所（当初の社名は鈴木商店亜鉛製錬所）である。当時、亜鉛の製錬のために7ヵ月の歳月をかけて巨大な煙突を建設。その後、輸入による原料確保が難しくなり、大正9（1920）年には閉鎖される。しかし、この土地は、鈴木商店の帝国石油（後、旭石油）徳山製油所として使用されることになる（鈴木商店破綻後、後の昭和シェル石油、現・出光興産に合流）。

72メートルの大煙突（稼働当時）

現在の姿

現在は、鈴木商店破綻後、南満州鉄道の子会社として設立された日本精蝋がこの土地を引き継いでいる。同社の設立を指揮したのは満鉄総裁の山本条太郎であった。同氏といえば、大正5（1916）年に鈴木商店の金子直吉とともに日本火薬製造（現在の日本化薬）を設立した人物である。

日本精蝋がこの場所を選んだのは、山本条太郎の金子直吉との縁もあったかもしれない。なお、日本精蝋の敷地内には、鈴木商店、そして帝国石油の境界杭が多数残っている。

日本精蝋の敷地内に残る鈴木商店と帝国石油の境界杭

☆☆☆

大正4（1915）年の11月1日には、金子直吉が「天下三分の宣誓書」をロンドン支店長の高畑誠一に送ったとされる。ほぼ同じ時期に建てられたこの2つの巨大な煙突は、鈴木商店の衝天の勢いを象徴するものといえるかもしれない。